

近世の知から近代へ その1 —博覧強記とくふうこと—

山本光正

はじめに

江戸幕府が成立し、世情が安定すると人々は様々な事象に関心を抱くようになった。知への欲求であり知の大衆化でもあった。知への欲求・多様な事象への関心などと記すと重厚なもの、或は精神性の高い知、高度な知識を求めようと思われてしまう。学問や研究のための知への欲求は当然だが、知への欲求の大衆化とは日常生活に便利なこと、物事の謂れなどを知りたい、「物識り」になりたいという欲求である。その欲求を満たすための出版物も各種多数出版された。

知への欲求が盛んになった当時の日本は鎖国という状況下にあった。そのため欲求を満たす素材の主な供給源は日本国内及び中国の出版物などと供給源には限りがあり、時代が下がるにつれ知への欲求に対応出来なくなってきた。

新しい知を求める欲求、エネルギーが頂点に達した時に明治という時代を迎えたのである。勢い良く渦巻いていた知への欲求・エネルギーは西欧の知の吸収に邁進したが、本稿ではこうした状況の前提となる近世における知への欲求、蓄積について述べ、近代における知への欲求、エネルギーシユな知の吸収が如何に展開したかについて述べるものである。

本稿は研究者を対象としてはいるが、本質的には研究者以外の人々に向

けての発信である。

緻密な基礎研究は学問にとって財産であり、蓄積されるべきものであるが、研究者以外の世界に発信し理解を得なければ、最大の支援者を失うことになる。特に人文系の研究は研究者仲間同士の慰めあいと、対立そして傷の舐めあいに終わってしまう。

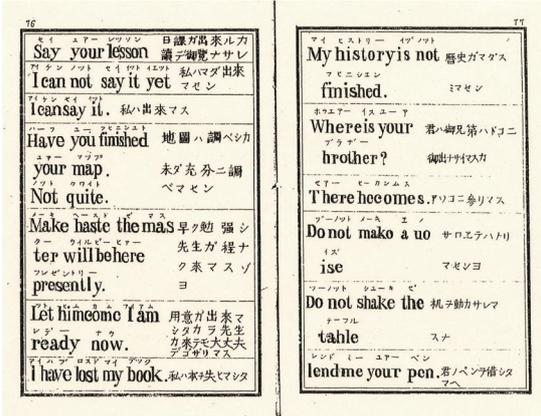
近世の知

一 知的欲求の前提としての識字率と出版の盛行

(一) 識字率

近世における知的欲求は特別な知識人だけのものではなく、多くの大衆をも巻き込むものであった。逆説的に言うなら、大衆もまた知的欲求、知識欲が強かったのである。

知識を得る方法の一つが出版物など文字からであり、得た知識は文字化されて保存される。近世日本は識字率が高かったと言われており、それを担ったのが寺子屋教育と言われている。このことは否定しようもないが、その大前提となる日本語の特性を改めてみておく必要があるだろう。時に識字率の高さは日本人の優秀さを示していると勘違いされるからである。



『独学英語通弁』明治20年刊 高木磐太郎翻刻出版

外国語のカタカナ表記2



『英学捷徑 セツ以呂波』慶応3年 阿部友之進著

外国語のカタカナ表記1

特に一般の人々はこの様に考
える傾向があるようだ。
日本語の特性について述べ
るといっても、学問としての
言語については知るところで
はないので、極めて稚拙な方
法で述べていくことにする。
現在の日本語の文字は平仮
名・片仮名・漢字からなっ
ている。このうち特筆すべき
ものが平仮名である。「いろは
にほへと……」現在であれば
「あいうえおかき……」を読
み書き出来れば何とか文章を
書くことができるし、知り得
たことを文字化することがで
きる。
これに対して西欧の言語は
アルファベット……ABCを
覚えたからと言って会話や知
り得たことを直ぐに文字化で
きるわけではない。ポニー・
ガール・オープンを直ちに文
字化することはできない。ス
ペルを覚えなければならな
い。日本語の漢字もおなじで
ある。平仮名が書けるからと
言って「山」「川」「青」とい
う漢字が書けるわけではない。
しかし漢字が書けなくと

も何とか文章は作ることができる。さらに発音の問題がある。日本語にも
微妙な発音があるが、欧米の言語に比べれば単純であろう。欧米といっ
たがそれよりも微妙な発音を必要とする言語がアジアや中東には多くある。
日本人にとって外国語の発音の難しさを端的に示すのが次の川柳である。
ギョエテとは俺のことかとゲーテ言
学生の時神田の古書店街に行くと「ギョエテ研究」という本を時折見
けた。
要するに日本語はその言語的特徴から平仮名という文字を作り出すこと
ができたのである。微妙な発音はあるが、「あ」は常に「あ」と発音する。
アルファベットでは「A」は日本語で恐縮だが、常に「エー」と発音する
わけではない。中国語等は初めから漢字を覚えなければ言語を文字化でき
ない。そのため簡体字が作り出されたことは十分に理解できるのである。
以上のように平仮名が作り出されたのは日本語の特性にあったからである。
日本語以外の言語で平仮名のような文字を作り出すことはできないのか
も知れない。兎に角発音さえ無視すれば、世界各国の言語を平仮名・片仮
名で書くことができるわけである。勿論片仮名発音の外国語が通じるかど
うかは別問題だが。
(二) 出版物
知りたいという欲求を満たすものの中で最大の効力を持つのが出版物で
ある。しかし高価なものであっては余程裕福な階層しか手にすることはで
きない。出版物を借用して写本を作成することも行われたが、それでは多
くの人々が読むことはできない。読書階層を広げるには出版物の低廉化が
必要であった。
出版物の価格を安くするためには安価な「紙」が必要であったが、近世
中後期には関東地方においても紙の生産が盛んに行われるようになり、安
価な紙が流通するようになったと考えられる。
ここで断っておきたいのは和紙≠日本の優れた伝統工芸品。世界に誇る
べきものという誤った考えを排除することである。確かにそのような和紙
もあるが、そのような紙は日常的なものではないし、そのような紙で出版

物を作ったらとんでもない値段になってしまう。

要するに粗悪な紙が大量に製造されるようになったのである。

原材料の次は印刷である。日本においても木製活字印刷も行われたが、印刷の主流になったのは木版印刷、語弊があるかも知れないが版画である。ヨーロッパにおいては活版印刷が発明されそれが主流になるが、恐らく活版印刷を業とするには相当の資金を必要としたであろう。これに対し木版印刷は板と彫刻刀そして墨があれば印刷できる。職人の技術は別として莫大な資金がなくとも出版は可能であったろう。

江戸時代のヨーロッパにおける出版事情については全く知るところではないが、気になるはヨーロッパにおいても木版の印刷物が多く出版されたかである。絵画ではなく文字を主とした読むための本である。これについて専門家ではないが、英国の保険会社に長く勤務していた知人の松田弥生氏に調べてもらったところ木版印刷の出版物は見つからなかったとのことである。

さらに松田氏の話によると、英国には日本の寺子屋のような施設は存在せず、教会や修道院が教育の場であったようだ。その際のテキストは聖書であったかもしれない。ともかく日本のように多くの子供たちが教育、読み書き算盤を学ぶことはなかったようである。

近世の日本では多くの往來物や粗末な小冊子が多数出版されたが、それは識字率の高さから文字を読むことのできる階層が多かったからである。安価な出版物とは言っても、当然のことながら誰もが気軽に購入できるものではなく、購入できる階層が広がったということである。従来より出版物を多くの人が所有するようになれば、それを借用することも容易になるわけである。

書籍の価格と言っても古書であるが、筆者所蔵の『泰平江戸往來』の末尾に次のような記載がある。「于時嘉永二酉年二月廿九日ひち町此代三拾五文也」本書は一九丁ほどの小冊子である。さらに多くの出版物には「此本何方参り候とも、御覽之上御返し可被下候」などと書かれていることがよくある。

二 知識人の知の蓄積

知の蓄積を代表するのが知識人である。近世の知識人にとって最大の要件は多くのことを知っているということである。事物の謂れ、諺などの謂れ、引用されている出典は何か等々博覧強記になるための必死の努力をしたのである。

彼ら知識人の知の蓄積を知るための素材は知識人達が書き残した記録である。こうした記録が多く収録されているものが吉川弘文館発行の『日本随筆大成』である。『日本随筆大成』には万巻の書が収められているが、その中でも群を抜いて大部であるのが大田南畝の記録である。

『日本随筆大成』には収録されていないが、やはり大部な記録を残した人物の一人に小山田与清がいる。ここではこの二名の人物を取り上げることにする。断っておくがここでは二人の記録を分析・検討することはしない。分析・検討をするだけの実力或はそのような博覧強記は毫も持ち合わせていないからである。

(一) 大田南畝

大田南畝の人物像については今更贅言を尽くす必要もないだろうが、簡単に記しておこう。南畝は寛延二年（一七四九）に生まれ、文政六年（一八二三）に没している。名は覃、通称直次郎、七左衛門。幕臣の御徒吉左衛門の長男として江戸牛込仲御徒町で生まれる。家が借財を抱えているため勉学に励み、四八歳の時に支配勘定、五三歳大坂銅座に榮転。五六歳の時には長崎奉行所勘定所に着任。老年に入る頃からの出世である。

一般には役人としての南畝より狂歌・狂詩の世界で著名だが、「世の中に蚊ほどうるさきものはなし、ぶんぶぶんぶといひて夜もねられず」の作者と目されたことから、狂歌から身を引いている。

南畝の貪欲な知識欲、博覧強記、多才の源泉が『一話一言』である（『一話一言』は何回か出版されたが、ここでは主に吉川弘文館発行の日本随筆大成本を参照）。

『一話一言』は南畝が見聞したことをはじめ、自身が調べたこと等々そ

の全てを記録したのではないかと思われる程膨大である。その分量は新版の『日本随筆大成』本で六冊に及ぶ。記録が全何項目に及ぶのかを数えるだけ無駄というほどである。この他にも狂歌に関する著作や記録もある。その一つが『半日閑話』である。『一話一言』に比べれば分量は極めて少なく、『日本随筆大成』で1冊であるが、それでも五八〇頁に及ぶ。

これらの記録の内容を紹介しようもないが、ここでは嘗て筆者が『半日閑話』から必要事項をチェックした幾つか紹介しておこう。

卷一 西川清左衛門の話（原文は長文のため筆者が要約）

西川清左衛門の先祖は手広く薪販売を営んでいたが、ある時付火をされた。その後も付火が続き犯人を見つけ出すため小石川富坂下町不動院の山伏に祈禱を依頼。七日七夜の七日目清左衛門所有の長屋で豆腐屋を営む三左衛門の妻と女兒が空中に掴まれ「怖い、怖い」という声が響き渡った。三左衛門は妻子を探し回り牛込御門辺りの堀で妻子の死体を発見。二代目三左衛門の弟はふと行方不明になり神隠しと言われている。

卷三 釣舟清次が事（原文は長文のため筆者が要約）

本八丁堀の清次は奇怪なことを言いふらしたということで、寛政二年（一七九〇）六月北町奉行初鹿野河内守信興の番所で尋問されている。清次は釣船稼業で、五月二四日品川沖下タミ瀬でキス一〇〇匹程を釣り上げた。漁獲物を買取業者へ運ぶ途中築地本郷町辺りの波除で船を掃除。その時背丈六尺で髪や髭は逆立ち異様な衣服を纏った男がいた。清次がキスを一匹渡すと名を尋ねてきた。清次と答えると、異様な男は我は疫神だがお前は正直なので家内・親類は釣舟清次と書いておけばその家には行かないという。家内・親類に話したところ近所の人が疫病というので「釣舟清次」と書いた紙を渡すと疫病が治癒したという。これを聞きつけた人たちが多く来るようになり、仕事にならないので今は書いていない。謝礼も受け取っていないという。

風聞によれば、疫神と称した男は盗賊で、水中を潜ること魚のごとく、屋根を飛ぶこと鳥のごとくであったが、寛政三年捕縛されたという。

筆者は以前『半日閑話』や『一話一言』から奇譚を探し出す作業をしたのでこのような記事を事例としたが、職務・学問をはじめ遊びなどあらゆる分野のことが書き留められている。

(二) 小山田与清

小山田与清は天明三年（一七八三）現在の東京都町田市に生まれる。江戸に出て国学者及び歌人でもある村田春海に学ぶ。その後見沼通船方の豪商高田家の養子になり高田姓となるが、後に小山田姓を称している。天保三年（一八三二）水戸藩の徳川斉昭に招かれて『八州文藻』の編纂に従事。弘化四年（一八四七）に没している。多くの著作を残しているが、ここでは『松屋筆記』（本書は全三冊で明治四一〜四二年にかけて国書刊行会より出版された）を見てみよう。

本書は文化末年頃から弘化二年頃まで書き留められたもので、各冊が五〇〇頁余に及ぶ。国書刊行会は本書出版にあたり、次のような例言を記している。

……此筆記は、広く群籍を渉猟し、適意の箇所を抜粹し、考えを加へ、案を施し、多くの例証を挙げて説明し、其引用するところの各原書には、巻数丁数を附して出処を明にし、孫引の如きは極めて少し、殊に詞の解釈に就きては、深く留意せられ、其引例該博適切にして、古人の説を匡補せられしところ多きを以て言語の研究には勿論、有職故実等を学ばんとするにも、最も有用なる良材といふべし、この例言自体が日本における研究のあり方を示しているといえるだろう。それでは本書の巻一の項目を列挙しておこう。

高野明神の使犬・伝教受灌頂於弘法・六観音本説・大安寺の堂・聖天の団・仁寿殿二間の観音・高野伝法院兩界の背壁・中川実範上人の歌・南都行念坊の歌・弘法大師の歌并頼瑜の歌・貞松坊最後・空晴僧都最後・義浄三藏并鑒真の墓・蒙古の使最後の詩・頼瑜夢想の歌十齋日六齋日等の縁日の事・善悪夢の呪・庚申夜の誦頌・鼻曳時の頌・長吏三綱所司・七僧・奈良七寺・歌書撰者・頼瑜が九月十三日の歌・諱諡号・南都解脱坊房詠歌・辰壽得業が歌・弘法大師誕生日・大日本国表示・芥子共・不動の辮髪・黒善阿弥陀仏発心・聖徳太子胎中の語・右流左死・拾の字・百字を度と訓

筆者の乏しい教養ではタイトルだけでは意味不明であるし、読んでもよく分からない項目等々雑多な記事が膨大に書き溜めてある。

雑多な記事—小山田与清自身は雑多という意識はなかったのだろう。飽くまでも筆者の目から見てである—から世俗的・日常的な記事を少し紹介しておこう。但し原文引用は長文に及ぶので筆者が要約した。

巻六の九小僮をデッチと言うこと。鎌倉大草紙下巻一六丁に「狂言者のでつしもてあつかふごとく心のまゝにしてありしかども云々」この記事について与清は「でつしは弟子をさとびごとにいへる也、今の俗に僕僮をデッチといふもこのデツシうつりし語也」。これは丁稚のことだろうが、出典まで挙げて記録すべきことなのかと思ってしまう。

巻一三の三二御袋。母を御袋と言うことは「永享御産所日記」に「御袋御方」とある。このほか「康富記」の享祿四年正月（一五三一）九日の条には、「今暁室町殿姫君御誕生也、御袋大館兵庫妹也」

巻一三の三六

浪人。浪人の名称は天武紀に浮浪人（うかれひと）と見える。釋紀に海賊と注があるのは間違え。今の牢人である。桓武紀にも浪人とあるというが、それが何なのかと問いたくなる。

巻一三の四一狐付をおとす方法。マチン・鉄粉・黒大豆を煎じて飲ませれば、狐は落ちる。尤もこの薬を飲まそうとすれば、飲む前に狐は落ちるといふ。この薬は全ての獣類にとって大禁忌である。

このほか巻七一の一六は「タムシ」の妙薬。同巻一七は「火傷」の妙薬。同一八は「目の傷の治し方」このうち目の傷の治し方は凄まじい。多くの蠅の頭を突き潰して乳汁に漬けてその水を目にさす。因みに出典の記載はないので伝聞であろうか。

そうかと思うと巻七八の五三では「ヤッコ豆腐」について蒞蓄を傾けている。一転して巻七五の五は「地動説」についてである。その記述は活字本で一頁余に及び、シーボルトも登場する。

近世日本における地動説の受容についての研究論文は多くあるようだ。天文学は門外漢であるが、当時天文学を研究或は関心を持っていた階層以外の人々は地動説即ち大地が回る、地球が丸いということをどの程度承知

していたのだろう。さらにそれを知った時の驚きを知りたいと思うが、このようなことについて記したものはあるのだろうか。このことは「日本人」を考える上で大きな意味を持つと思うが、それこそ落語の起源となる小噺に出てこないものであるか。さらに地動説について書き留めた小山田与清は地動説から何か触発されたのだろうか。それとも他者と話す時「知っている」素材にするために記録しただけであったのだろうか。

最後に『松屋筆記』のオカルト的記事を紹介しておこう。巻六五の一三の「少女毛与」は与清の亡くなった息子の清年の生まれ変わりであるといふことを多くの文献を引用して述べている。

太田南畝の『一話一言』等も手当たり次第に書き留めたものであるが、『松屋筆記』に至ってはそれを上回るもので支離滅裂の感がある。南畝にしても与清及び様々な見聞や調べたことを記録した近世の「知識人」は書き留めたことを記憶しているのだろうか。近代に入ってからの人物であるが南方熊楠のような人物もいたのだから記憶は出来ないと断定することはできないが。

何でも知っている。博覧強記である。しかも場合によってはこれでもかというほど出典が記される。他者より多くのことを知っているという自負が近世知識人の拠って立つところだったのだろうか。

博覧強記、出典を明記する。それは現代の実証主義の歴史学が受けついているものである。『松屋筆記』の刊行は明治四一年であるが、前掲の例言からも分かるように膨大に書き溜められたこのような記録は崇め奉られるものなのである。

『二話一言』『松屋筆記』等このような記録を書き溜めた当人たちは記録を縦横無尽に駆使することができたのだろうか、何かを生み出すことができたのだろうか。後年の研究者にしても、これらの記録を部分的に利用するだけと言ってよいだろう。但しここではこうした近世知識人を揶揄しようとするのが目的ではないことを断っておく。

三 近世大衆の知の蓄積

近世の知識人はこれまで述べてきたように見聞したこと自ら調べたこと

を書き溜め、あえて言うならば自分だけのエンサイクロペディアを作りあげた。知らないことを知りたい。他者より多くのことを知りたいという欲求は知識人だけではない。一般大衆もまた同様であった。しかし一般大衆は自ら調べたり、見聞したことを書き留めている余裕などなかったであろう。手っ取り早く「知る」方法は出版物を読むことであろう。そこで早く知りたい、蘊蓄を傾けたいという欲求を満たす出版物が発行された。

このような出版物は「重宝記」などと呼ばれたが、これもまた多分野に亘り、恐らく重宝記の研究者は分類を行っているであろう。ここで言う「蘊蓄を傾けたい」という欲求を満たす出版物は「重宝記」と言うより「百科事典」とまでは言えないものの「物知り事典」或は現代の「実用書」「ハウツー本」のようなものである。

以下筆者が想定している出版物のうち代表的と見られるものについて見ていくことにしよう。

(一) 『塵添搥囊抄』

刊行された重宝記類の初期のものは『塵添搥囊抄』である。本書を重宝記の類と同列に置くことに疑問抵抗を感じる研究者は多いと思うが、その内容は重宝記に通じるものがあるのでここでは重宝記・実用書として取り上げた。本書は『搥囊抄』や『塵袋』などをもとに室町時代に編纂され、一六〇〇年代中頃に出版された。

本書の記述の一部を見てみよう。巻一は「五節供事」「七草事」「囉物事」「端午事」「五月子事」(以下略)。巻一〇は「恒娥事」「十二月異名事」「四季異名事」「十二時異名事」「十干異名事」(以下略)等々で、今でも手紙の書き方や手帳の付録にあるような事柄も多く見られる。出版されたからといって恐らく高価なものであり、本書が広く普及するなどということはないであろう。しかし本書を借りて必要箇所を写し取ることは随分と行われたと思われる。

(二) 『萬寶鄙事記』

ポピュラーな重宝記・生活百科全書が出版されるようになったのがいつ

頃からは定かではないが、ここでは貝原益軒の『萬寶鄙事記』を取り上げる。尚ここで引用する典籍は基本的には筆者所蔵本であり、所蔵本以外の場合には出典を記す。

貝原益軒は同様の出版物として天和三年(一六八三)頃に『和事始』を出版。元禄一〇年(一六九七)『漢事始』を出版している。

『萬寶鄙事記』(全八巻)は何種類か出版されているが、筆者所蔵本には各巻一冊本と二巻合冊本がある。この内一巻と二巻の合冊本の前書の末尾に
宝永乙酉孟夏吉辰

貝原篤信記

と記されている。しかし一巻本にはこの記載は無いが、八巻の巻末に

宝永乙酉年孟夏吉辰

洛陽六角通書林

茨城多左衛門板行

萬寶鄙事記卷八 大尾

とある。尚一巻本と合冊本を比較すると、一巻本は刷りが鮮明であるが合冊本は不鮮明である。版木の磨滅によるものであるだろうか。

次に本書の内容をみてみよう。

『萬寶鄙事記』全八巻は一九項目からなり、各巻の項目は次の通りである。

- 巻一 衣服・営作
- 巻二 器財・硯墨筆紙・文字
- 巻三 刀脇指・収種法・花・香・火
- 巻四 紙細工・染物
- 巻五 去虫鼠・雜門
- 巻六 占天氣・月令
- 巻七 養氣・食禁
- 巻八 用藥

以上の一九項目であるが、内容を紹介しているとその面白さにきりなく紙数を費やすことになってしまうので省略せざるを得ない。

『萬寶鄙事記』の記事は現代からみれば否定されるべきものも多々あるが、当時としては信用に足るべき書として人々に迎えられたであろう。

(三) 『拾玉智恵海』

『萬寶鄙事記』以降重宝記を代表する一つが『拾玉智恵海』である。『拾玉智恵海』は藤井政武編全三巻である。出版年は明確ではないが、享保九年(一七二四)頃のものである。本書に引き続いて『拾玉統智恵海』(全三巻)さらに『拾玉新智恵海』(全三巻)が出版されている。

次に『拾玉智恵海』上巻の中から幾つか項目を紹介しておこう。

○錫の徳利鑿(えくぼ)なをしやう

○鍋も水もなき所にて飯を炊きやう

○刀脇指の錆を早速をとす法

○衣服に酒のしみたるを洗ずして落す法

○小便を久しく堪へる法

○日和の善悪(よしあし)を知る法

○菊の切花を春まで貯ふ法

拾玉シリーズに限ったことではないが、怪しげな記事もかなりある『拾玉新智恵海』から幾つか紹介しておこう。但し原文引用ではなく筆者が要約したものである。

上巻

○何日も眠くならない法

ハイタカ(鷹の一種)の尾を黒焼きにして水に溶き、ヘソに入れて上から糊の付いた紙を貼る。

○闇夜でも目が見える法

フクロウの羽を黒焼きにして浮草の汁で溶き、目に付ければ暗闇でも見える。

中巻

○天地三神靈妙香(製法は省略)の効能

*天に向かつてこの香をたけば諸々の望みが叶う。

*山中でたけば猛獸・毒蛇・毒虫が近づかない。

*常にたけば盗賊や剣難を免れる。

(効能はまだ続くが省略)

下巻

○屋敷へ蛇を入れ

ない呪法

小さな木札に白

馬と書き、札を

逆さまにして屋

敷の四隅に建て

る。札より中に

蛇は入らない。

○釜の鳴るのを止

める呪法

釜の鳴る時は婆

女(ばじよ)婆

女と唱える。婆

女は竈の神の名

で唱えれば凶事

も変じて吉事と

なる。

○このような重宝記

―既に重宝記とは言

えない内容である。

物知り辞典とでもい

うべきであろうか―

は前述のように各種

出版されている。僅

かではあるが筆者の

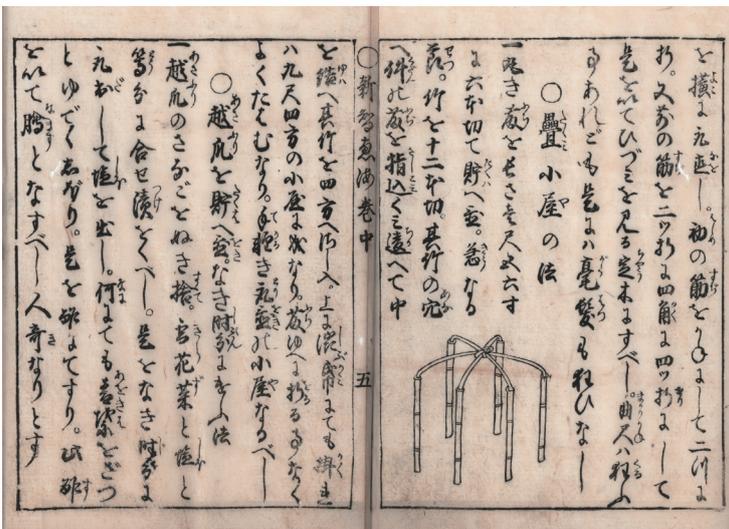
手許には『妙術博物

筌』『錦囊智術全書』

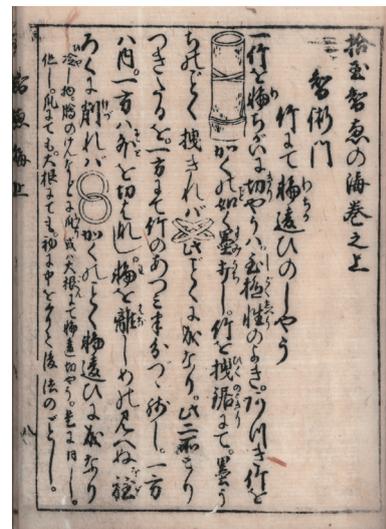
『秘伝世宝袋』『諸

人日用宝』などがあ

るが中には『拾玉智



『拾玉智恵海』中 享保年間カ 藤井正武編
簡易テントの作り方



『拾玉智恵海』上 享保年間カ 藤井正武編
竹を輪違いに切る法

『惠海』の剽窃本のような内容のものもある。

上記の書籍は何れも同じような内容であり、マンネリ化してしまっている。新たな情報を求めようにも情報源が枯渇してしまっただけである。鎖国下の日本では海外から流入する情報は少なかった。ましてや一般大衆に届く新たな情報は極めて少なくなってしまう。

四 幕末と近代を結ぶ『萬寶新書』

(一) 蘭学者の登場

近世後期に至ると蘭学者と呼ばれる知識人が登場した。従来の知識人は蓄積した知の世界に遊んだが、蘭学者達は吸収した知識を基に新たなものを創り出そうとした。

鎖国下の日本においては西欧の知識・情報を取り入れることは原則として禁止されていたが、辛うじて交易のあったオランダから情報、そして中国語訳された西欧文明が入ってきた。さらに時代が下るにつれ僅かではあるが、西欧の出版物も日本に入ってくるようになった。

考えてみれば西欧文化を「蘭学」それを学ぶ者を「蘭学者」ということ自体奇異なことであるが、それが鎖国の実態であろう。

時代は前後するが、江戸幕府は文化八年(一八一二)フランス人シヨメールの百科事典「家事百科事典」のオランダ語版の翻訳を開始。翻訳は天保十一年(一八四〇)まで行われ、訳本の書名は『厚生新編』とされた。

安永三年(一七七四)『解体新書』が出版されるが、そのきっかけとなったのは明和八年(一七七二)の小塚原刑場の罪人の腑分けであった。この時既に杉田玄白と前野良沢は『解体新書』の原本である『ターヘル・アナトミア』を所持していた。

天保八年(一八三七)から弘化四年(一八四七)にかけて宇田川榕菴により『舎密開宗』が出版された。『舎密開宗』はイギリスのW・ヘンリー著『Elements of Experimental Chemistry』のドイツ語訳をオランダ語訳したもので、言うまでもなく日本における初めての化学専門書である。

この他にも邦訳された西欧の著作も多くあったであろうが、一般大衆とはかけ離れた存在であった。一般人が『解体新書』や『舎密開宗』をみた

ところで理解できるわけではない。邦訳された著作は医学・化学など理系のもものがよく知られるが、文系・人文系・社会科学系の著作はどの程度日本に入ってきているのだろうか。人文系・社会科学系の流入は思想にも関わるものであり、輸入については特に注意されていたと思われる。理系の著作とは異なりある程度の知識があれば理解することができるところである。安政四年(一八五七)には『那波列翁伝』(ナポレオン伝)や、ロビンソン・クルーソーの物語『魯敏遜漂流行紀略』が出版されている。しかし一般大衆が待ち望んでいたような「知りたい」という欲求を満たすような著作は出版されなかった。

(二) 『萬寶新書』

『舎密開宗』は化学の専門書であり、蘭学・化学の知識が多少あっても理解できるものではない。それに対して『萬寶新書』は強引な言い方になるが、化学が生活にどのように役立つのかについて記したものであった。手許にある『舎密開宗』巻一三の目録をみてみたが、化学知識皆無と言つてよいほどの筆者には理解不能である。巻一三の二〇八章では銅、二〇九章硫酸銅、二一〇章硫酸暗摸尼亞銅、二一一章消酸銅、二一二章塩酸銅で、その内容に至っては若干は成程と思うものもあるが、大半は意味不明である。

前述のように専門書がある程度具体化したものが『萬寶新書』である。

『萬寶新書』はオランダのアムステルダムで出版されたものを、宇田川興齋が翻訳し万延元年(一八六〇)に刊行された。

本書初篇の目次の一部を紹介しておこう。

- 一 果類ヲ久ク蓄フル法
- 二 醋(酢)ヲ善ク貯ル法
- 三 臥褥ニ用ル羽毛ヲ浮製スル法
- 四 書籍ノ黴ヲ防グ法
- 五 葡萄ヲ貯蔵スル法
- 六 鶏ニ多ク卵ヲ生マシムル法

タイトルだけを見ていれば誰もができるようにみえるが、簡単にはいか

ないようである。初篇九二の「美艶膏ノ法」要するに肌を美しくするクリーム
の製造方法は以下の通りである。

黙加帝列並底那三十□・扁桃油舊秤四□・鯨腦四錢重鉛華二錢・白蠟
四□・薔薇水六□ヲ調和シ。軟粥ノ稠ト為ス○此膏ハ。皮膚ヲ調トノ
エ。色ヲ白クス。○重鉛華ハ。元ト皮膚ニ害アル者ナレドモ。此諸件
ニ和スレバ。此害ヲ遺スコトナシ。(□は分量の単位だが判読不可)

専門書がある程度具体的にしたものと同述したが、矢張り筆者にはよく
分らない。当時本書を理解できた人はどれくらいいただろうか。当時の
一般的な知識人の知識・教養の埒外にある分野の書籍である。気軽に読ん
で蘊蓄を傾けるといふようなものではないし、何度も熟読すれば意味が分
かるというものではない。全く新しい分野であり、「重宝記」「生活百科全
書」の域を越えた専門書、或は学術書である。

他者より多くのことを知りたいというよりは、学問的に知りたいという
従来とは異なる流れが形成されつつあったのである。橋本萬平は「一つの
物理学史」(『大学の物理教育』一九九九年九九卷三号)において次のよう
述べている。

なお国民大衆の物理知識を知るのに逸してはならないのが、「秘事、
秘法本」系統の書物である。一般に日本では特別な技術、知識は、一
子相伝といわれ、一門以外に知られるのを嫌ったと伝えられているが、
理科的な知識は、刊本として広く流布していた。それらの本は『智恵
海』『秘事指南車』『秘事思案袋』その他種々の名前のものがある。初
期の「秘事、秘法本」は、主として占いや迷信的な内容が多いが、そ
の中に水を流す為にサイフォンの原理を使用したものや、レンズが水
晶製かガラス製かを知る為に舐めてみよとする熱伝導の物理学的知識
に関するものがある。

これら「秘事、秘法本」は幕末になって西洋の科学知識が流入すると、
それらを取り入れて全く内容が一変した。それらの本は

杉田信成郷 万寶玉手箱、安政五年(一八五八)
宇田川興齋 萬寶新書、万延元年(一八六〇)
本木昌造 秘事新書 慶應四年(一八六八)

である。この系統は明治になって宮崎柳条の多くの本に引き継がれて
いる。これらの本を調べることによって、当時の一般人の物理知識の
普及を知ることが出来る。

橋本氏が「全く内容が一変した」というように秘事・秘法本とは全く別
の本が、そして全く別の世界が展開することになったのである。前述のよ
うにかなりの知識が無ければ内容を理解することなど不可能であるし、日
常的に家にあるもので出来ることではない。さらに橋本氏は「当時の一般
人の物理知識の普及を知る事ができる」としている。橋本氏は特別の意味
を持つて「一般人」と言ったわけではないと思うが、筆者は「一般人」の
興味そして知識に強い関心を持っているため敢えて述べておくが、物理知
識の普及を吸収できるような人々は一般人ではないだろう。一般人とは区
別される階級である。ここで言う階級とは身分的階級ではないことは言う
までもない。

上記の化学・物理学などの理科学書は一般大衆が興味半分で読めるもの
ではなく、大衆の知りたいという欲求を満足させられるものではなかった。
欲求が飽和状態に達した時に近代を迎えたのである。そして上記のような
書籍あるいは翻訳に従事した人々の努力が近代に至り一気に開花するの
である。

最後に筆者が疑問に思うことを記しておく。例えば『萬寶新書』を理解
することができたとしても、それに必要な薬品類を調達することができた
のであろうか。科学史・化学史の研究者にとっては常識であるのかも知れ
ないが、門外漢の者にとって薬品を入手できたかどうかは大きな疑問である。

五 近世の知が生み出したもの

近世社会に蓄積された知は多様なものを生み出した。今日なお多くの
人々に読み継がれる文学作品から泡沫的な出版物。芝居・話芸や多様な音
楽等々。日本各地には俳額・算額や句会の句集をはじめ、博覧強記になる
ために書き溜めた記録など近世の人々の知の蓄積の結果が残されている。
これらの遺産は「文化遺産」として貴重なものであり、後世にまで大きな
影響を及ぼしている。

蓄積された知は近世という枠の中では革新的な思想や、新たな社会体制を考える必要もなかった。さらにそのような考えを公にすれば生命に関わることにもなった。世間から批判されることなく一目置かれるのは「いろいろなることを知っている」「博覧強記」であり、知っていることは頭がよくいと評価される。

稀有な大きな考えを公にしたり、世間の耳目を集めることが憚られたのはモノ作りにおいても同様であった。

このような状況下でも飛行機を作ろうという者もいた。現在の滋賀県長浜市の鉄砲鍛冶國友一貫齋こと九代目國友藤兵衛（一七七八〜一八四〇）は反射式望遠鏡を作ったことで知られるが、飛行機の設計図も書いている。図面を書いただけであつたから世間を騒がせることもなかつただろう。

現在の岡山県玉野市の表具師浮田幸吉（一七五七〜一八四七）は実際に飛行機を作り、岡山県の旭川の京橋から数メートル飛行するも直ぐに落下したというが、大騒ぎとなり捕らえられて岡山所払いとなっている。幸吉はその後現在の静岡市に移り義歯作りに従事するが再び空を飛び、世情を騒がせた罪で死罪になったとも、静岡近傍の見附で平穏な余生を過ごしたとも伝えられている。

近代に至り二宮忠八（一八六六〜一九三六）がゴム動力の飛行機を作り飛ばしている。軍隊にいた二宮忠八は上官の長岡外史らに飛行機について述べるが取り上げられず、除隊後も飛行機造りを続けるが、ライト兄弟の飛行のことを知り飛行機造りを断念した。

スケールの大きいことを行うのは日本人の体質に合わないのだろうか。戦艦大和のような巨大戦艦製造事例もあるが、既に巨大戦艦の時代は過ぎようとしていた時である。また世界の最先端をいくカミオカンデのような巨大観測装置も作られている。しかし日本の技術は本質的には宇宙探査機「はやぶさ」などコンパクトな装置のようである。

スケールの大小はともかく、鎖国下の日本そして海に囲まれた日本においても多くのモノが作り出された。それは基本的には目立たないもの、あまり大きくないものであつた。その一方高価なもの珍奇なものを手許に引きずり寄せること、大衆化するエネルギーは強烈であつた。幾つか事例を

示しておこう。

レンズは外来品で高価なものであつたが、近世後期にはある程度の生活をしていく階層のものは眼鏡を持つことができたようである。但し近視用か遠視用か、または遠近共に作成できたのかについては筆者の知るところではない。望遠鏡も近世後期にはかなりの普及していたようで、江戸の湯島天神の境内や街道筋の茶店に置いてあり、客はこれで風景を楽しんだ。

時計も近世初期に日本にもたらされたが、定時法の時刻表示を日本の時刻表示である不定時法の「和時計」を作り出している。和時計は高価なものであつたが、簡便な「尺時計」なるものを考案製造している。その一方で東芝の創業者である「からくり儀右衛門」こと田中久重（一七九九〜一八八一）は精密極まる万年時計を作っている。

和時計の仕組みはからくり人形に繋がり、生活に密着した水車にも及んでいる。複雑な水車は和時計そのものであり、これらの装置に重要な役割を果たしたのが歯車である。

蒸留装置も日本にもたらされた。その材質はガラスや金属であつた。これに関心を示した日本人はガラスや金属は高価なため磁器製の蒸留装置を作ってしまった。これを一般に「蘭引」ランビキと呼び瀬戸物屋でも販売していたという。「蘭引」で焼酎などを作り楽しんだということである。海外の蒸留装置はガラスや金属製のため蒸留中にガラス・金属の成分が溶け出すことがあるが、磁器製は性能が良かったとのことである。

近世には数学も盛んになり現在では和算と呼ばれている。多くの人々は和算Ⅱ関孝和Ⅱ世界に誇る数学者であると認識している。算術そのものは帳簿・年貢・土地の計測等々日常生活の中に入り込んでいた。しかし高度な数学は実学・実生活とはかけ離れていたようである。神社などに算額を掲げるなど真摯に研究に取り組んでいたというより、狭い世界で数学を弄くり回していたのである。中山茂はその著『近世日本の科学思想』（平成五年 講談社学術文庫）において「和算は所詮東海の一孤島、文明の吹きだまりに咲いた仇花だったのだろうか。」と結んでいる。

このような事例を挙げていくと限界がなくなるが、近世社会で作り出された最も日本的なものの一つが「根付」である。小さな根付は取りあえず

幕府を批判するものではなく、人心を惑わすこともなければ、社会不安を引き起こすこともない。その一方技術が向上すれば人々が驚嘆するようなものを作り出すことができる。作業工程は目立たず、完成品は人目を惹く。近世文化は「根付文化」と言ってもよいだろう。近世日本は根付文化的思考により、モノ作りの世界だけではなく、社会もまた根付社会化していくのである。さらに多くの近世の人々の世界観は箱庭の世界であった。

近世の人々が蓄積した知は歴大或は膨大であった。しかし近世社会では蓄積された知をどのように表現したらよいのか、具現化したらよいのか、分からなかった。或はすることはできなかったが、近世における知の蓄積は近代に至り新たな展開をみせることになるのである。

(やまもと みつまさ 交通史学会元会長)